

モテットCD録音奮戦記！（2013年6月8日・9日 秋川キララホール）

団員 K (Sop.)

2013年6月8日（土）午前、秋川キララホール。

初めてのCD録音にワクワクドキドキしながら会場に入りました。別室で団員達と一緒に準備体操と発声練習を終えて録音会場に入ると、すでに録音技師の方たちや録音担当の団員によって、舞台のあちらこちらにたくさんのマイクが設置されていました。



まずは団員の並び方について三澤先生から説明があり、恐る恐る立ち位置へ移動。マイクの前に立つだけでドキドキ！ しかも演奏会のように並ぶわけではありません。各コアの前に置かれた1本のマイクに対して団員皆が等距離になるよう並ばな

ければならないとのこと。TBSは団員数が多いので、女声パートはどうしても3列になるのですが、皆がマイクから等距離となると前後左右共にぎゅうぎゅう。最前列は椅子に座り、後ろ2列は立ったまま。「こんな配列で歌ったことない！私の声、隣と前の人に丸聞こえ！迷惑かけちゃうし！」という私の個人的な不安をよそに録音はスタートしたのであります。

しかし、実際演奏が始まるとそんな不安はどこへやら、三澤先生のタクトに集中し、演奏会でも通奏低音楽器を演奏して下さった、西沢央子先生(Violoncello)、櫻井茂先生(Contrabass)、浅井美紀先生(Organo)の伴奏に合わせて、モテットの世界にぐいぐい引き込まれていきました。それまでの長きにわたる練習や、合宿で行われた恐怖の小アンサンブル練習、そして2週間前の演奏会ですっかり体に沁みこんだモテット全曲演奏は、とうとうこのCD録音で歌い締めです。一抹の寂しさを感じながらも、自分達はこのモテットで何を伝えよう表現したいのかを改めて考えつつ、全神経を集中して歌いました。

でもこの集中力、演奏会で歌う時とは全く別のものでした。1曲歌い終える度に三澤先生と録音技師さんで録音状態を確認。私達団員もその場でプレイバックを聴かせていただきましたが、「これは歌い直しだな…」とか「うまかったかな？」とか緊張しながら三澤先生の次の指示を待ちます。先生から「OK!」という爽やかな合図をいただけたら次の曲に進む、という流れなのです



が、ある時は各コアのバランスや歌い方を調整したり、またある時は会場で発生する耳には聞こえない微かな雑音の正体をつきとめるため、団員有志が会場内を調べまわったりと、様々な要因による録り直しも多々ありました。このように演奏に対する集中と録音確認作業のための待機が交互に繰り返されるため、気力と体力を上手に維持させなければなりません。歌い続けるのも大変ですが、極度の集中と弛緩が繰り返されるのもそれはそれでかなり消耗します。

そんな中、2日間にわたり三澤先生の奥様が美味しいお菓子を差し入れて下さったり、今回の録音に参加できなかった団員からものご飴やフルーツが届くなど、陰で支えて下さる方々の励ましにどれだけ支えられたことか！感謝の気持ちでいっぱいになりました。合唱を歌うことによってたくさんの方たちの温かい気持ちに触れ、また皆と声を合わせることの楽しさと幸せを噛みしめた二日間でもありました。

それにしても…。一番大変だったのは三澤先生です。演奏中は指揮をし続け、その後は休む間もなく音楽監督として録音の確認。OKだったら引き続き次の演奏、と…。そのうえ、三澤先生は二日間ご自宅から自転車で録音会場に通い、二日目の録音終了後はスイミングをするために途中プールに立ち寄られたということ。超人的な精神力と体力です。

そんなこんなの、モテット全曲録音の2日間でした。一日目は奇跡的に8声モテット4曲の録音を終えることができ、二日目も思ったより順調に進み予定時刻通りに会場を後にしました。これはもちろん演奏を楽にこなしたということではなく、ひとえに三澤先生の音楽監督としてのお力と、通奏低音楽器を演奏して下さった諸先生方の支え、録音担当の方々の技術力とご尽力、そして団員皆の集中力と結集力の成果だと思います。

そして現在（執筆日 H25年8月）、CD完成に向け鋭意作成中！なかなか良い仕上がりになりそうですので、ご期待下さい♪

※モテット全曲CDはH25年12月1日に発売開始となりました。こちらです →

【CD情報】

タイトル：J.S. バッハ作曲 モテット全曲

指揮：三澤 洋史

レーベル：東京バロック・スコラーズ

発売日：2013年12月1日

定価：2,625円

